

PIL 概念についての考察

塹江 清志, 水野 和夫*, 塹江 光子**

生産システム工学科

(1996年8月28日受理)

The Concept of the Purpose In Life (PIL)

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO* and Mitsuko HORIE**

Department of Systems Engineering

(Received August 28, 1996)

The purpose of this paper is to discuss the concept of the PIL (PURPOSE IN LIFE) proposed by FRANKL.

FRANKL proposed a new type of neurosis, i.e., "existential neurosis", and created a new category of neurosis, i.e., "spiritual neurosis".

He proposed the concept of the PIL as a theory to explain "existential neurosis".

This research gains the following conclusions from comparing the PIL concept with other related concepts.

- (1) The PIL concept corresponds to the Japanese "IKIGAI" concept.
- (2) Jung's "SELF-ACTUALIZATION" concept is a concept of a way of acquiring PIL.
- (3) The difference between "PIL" and "IKIGAI" is that the former is derived from "GOD", but the latter is derived from "human relations".

1 目的

本論文の目的は、Frankl の PIL (Purpose In Life) (人生の目的・意義・意味) という概念 (言葉) について考察することである。彼が、人間存在にとっての生存環境としては極限状況と云える最悪の苛酷な状況であったナチスの強制収容所において生を全うしたことは周知のところである。彼が彼の生を維持できたのは彼が強制収容所の中で彼の「人生の目的・意義・意味」を喪失しなかったからである。この体験から、彼は人間存在の「生」をその根底において支えるのは彼の「人生の目的 (Purpose In Life: PIL)」意識 (日本語で云えば「生きがい」意識) であると確信し、「PIL」という概念 (言葉)、そして、その理論を創唱したのである。そして、この PIL 理論を基盤にして心理療法としての「ロゴセラピー (Logotherapy)」を創設したのである。

2 PIL 概念

PIL とは、Purpose in Life の略で、日本語では「人生の目的 (意義・意味)」という意味になる。ここでは、この概念 (言葉) についての Frankl, V.E.^[1] の理論を以下に概略して、この概念 (言葉) の意味を明らかにする。

2.1 PIL 概念の理論

Frankl^[1] の PIL 概念の理論は以下のようである。

① 「意味への意志」, 「人生の意味」

人間存在は、生来的に「意味」を求める存在である。換言すれば、「意味」探求・希求・獲得欲求をもった存在である。究極的、根源的には人間は自己の「生」, 「人生」の「意味」を求める。つまり、人間は自己の「人生の目的 (意義・意味)」を求める存在である。換言すれば、自己の「人生の生きる価値・甲斐」, すなわち、「生きがい」を求める存在である。

したがって、PIL, すなわち、「人生の目的」とは「生きがい」のことであり、人間は「生きがい」希求の欲求を生来的にもった存在なのである。

*愛知技術短期大学, **岐阜教育大学

② 実存的自由

人間存在には、生来的に「実存的自由」が備わっている。前述の人間存在が生来的にもつ「生きがい」（希求の）欲求が発動され、充足されるのはこの自由においてであり、また、この自由が存在する限りにおいてである。この自由が存在する限り、この自由の現実化、具現化はこれを所有する人間個々人の手に委ねられているのである。この意味で人間個々人はこの自由に対して「責任」を負うべきなのである。

「責任」とは「使命」である。したがって、人間個々人はこの自由に対して自己に課せられた使命を自己の人生において遂行することによってこの自由に対して責任を果たすべきなのである。

③ 「責任」の根拠

この「責任」は人間個々人の「良心」から発生する。「良心」とは「神（の声）」なのである。したがって、人間個々人は神に根拠づけられた良心から発生する責任・使命を彼の人生において遂行すべきなのである。

ここに人間個々人の「生きる甲斐・価値・目的・意義・意味」が存在する。つまり、「生きがい」が存在する。使命を達成することによって「生きがい」欲求が充足され、「生きがい」感を意識できるのである。

それゆえ、人間個々人は、彼の「生きがい」（感・意識）を神から付与されると云えるのである。

④ 「責任・使命」の内容

「責任・使命」の内容は「価値」である。したがって、神からの責任・使命を達成するということは、人間個々人が自己の置かれた個別的利害状況の中で自己の即自的欲求充足に終始する生き方を追求して個別利害に生きるのではなく、自己を超越した「普遍的価値」の実現化を志向して生きる（「身体的」、「心理的」次元によって構成された平面を超越して生きることを可能ならしめる「精神的」次元を生来的にもった人間存在にはこのことが可能なはずである。）ということである。

このとき、人間個々人は神から付与された「生きがい」を達成したことになる。ここで、人間個々人は「価値」を選択する状況におかれるのである。

⑤ 価値選択

この価値を選択する状況という価値の「選択」ということが許されるのは、人間存在に「実存的自由」が存在するからであり、この限りにおいてである。ここにおいて、人間個々人は、彼が生来的にもつ「人生の意味」希求欲求、すなわち、「生きがい」欲求に動機づけられて、自己の人生を託す（投企する）に足る、換言するば、「生きがい」欲求を充足させうと思われる対象としての「価値」を自己の価値観に基づいて選択する。

⑥ PIL 概念

以上のことから、PIL、すなわち、「人生の目的」という概念（言葉）が、「生きがい」のことであり、この概念が以下のようなものであると分かる。

「生きがい」欲求は、人間存在が生来的にもつ「意味への意志」にその源泉をもち、「生きがい」の対象となる「価値」の選択は人間存在に生来的に備わった「実存的自由」により可能となる。そして、「生きがい」欲求の充足、ということは、「生きがい」感・意識は、神から人間存在に課せられた「責任・使命」である「価値実現」を通して神から付与されるということが分かる。

⑦ 価値の種類

前述のように、人間個々人は、実存的自由の下に価値選択の状況において彼の価値観に基づいて価値を選択する。そして、その価値を彼の人生において実現することによって生きがいを獲得しようとする。この「生きがい」の対象としての「価値」には以下の3種類の価値が存在する。

〈1〉創造価値 〈2〉体験価値 〈3〉態度価値

2.2 精神因性神経症

Frankl^{[1], [2]}は、人間存在は、自己の人生においてPIL、すなわち、「人生の目的」・「生きがい」が見い出せないとき「実存的欲求不満」に陥るといふ。この「実存的欲求不満」は人間個々人に「実存的空虚感」を生ぜしめ、これが「精神因性神経症」の因となると主張したのである。

彼は、従来から普通一般に「神経症」とよばれてきたものは「心理的原因」、すなわち、「心因」による「神経症」、つまり「心因性神経症」であるという。彼が発見した「精神性神経症」はこれとは別種であると主張する。

人間存在は、身体、心理、精神の3つの次元より構成されており、「心理的」次元での「神経症」が「心因性神経症」であり、「精神的」次元での「神経症」が「精神因性神経症」であるとのことである。

そして、この精神因性神経症に対する特殊心理療法として彼は後述の「ロゴセラピー」を創設したのである。

2.3 PIL テスト

Crumbaugh^{[3], [4], [5], [6], [7], [8], [9]}は、前述のFranklの「精神因性神経症」について一連の研究を行っている。彼等は、精神因性神経症が心因性神経症とは異なったものであるかを検討しようとした。それで、精神因性神経症の原因であるとされたPIL、すなわち、「生きがい」喪失度と神経症との関係を検討した。このとき、PIL、すなわち、「人生の目的」どの程度経験、体験、意識、自覚しているかを客観的、数量的に測定するために彼等

によって「PILテスト」が開発されたのである。

3 ログセラピー (Logotherapy)

3.1 ログセラピーとは

① 「ロゴス」という言葉

「ロゴス (Logos)」という言葉はギリシャ語で「言葉」, 「理屈」, 「道理」という意味で, 日本語の「言葉」, 「ことわり (道理)」に相当する言葉である。この意味から, 「ロゴス」は, 「思想」, 「考え」, 「原理」, 「法則」の意味に用いられる。

人間の精神機能を二分し, 一方の「感情」機能を「パトス」とよぶとき, 他方の「理性」, 「論理理性」, 「思考能力」を「ロゴス」とよぶのにこの言葉は用いられる。

精神分析的用法としては, 「ロゴス」は「意義」, 「精神」の意で用いられ, 「人間が経験の中で感じる「意味」の深さ」という意味で用いられる。

「ログセラピー」という言葉の「ロゴ」は「意味」であるので, 「ログセラピー」は「論理療法」ではなくて「意味療法」という意味である。

② 「ログセラピー」とは

「ログセラピー」とは前述のように Frankl^[1]の創設した精神因性神経症に対する特殊心理療法のことである。そして, この「ロゴス」は今述べたように「意味」であるから, 「意味療法」という意味である。

PIL, すなわち, 「生きがい」喪失によって「実存的欲求不満」, 「実存的空虚」を通しての「実存神経症」である精神因性神経症に陥っている患者を支援して, 彼が人生の目的・意義・意味を取り戻すようにする「療法」という意味である。

3.2 ログセラピーにおける人間観

ログセラピーにおける人間観は以下のようなものである。

① 包括的人間観

人間の統合性と全体性を重視し, 人間を独自の存在として捉えている。そして, 「次元的存在論」の立場より人間の多様性を捉え, 人間を「身体」, 「心理」, 「精神」の3つの次元より成るものとして捉えている。

この人間存在の3つの次元の中で, 人間の本質が「精神面」にあるとしている。「人格 (Personality)」とは, 「現象化された精神」, すなわち, 「精神の表現とその活動の手段である心理的, 身体的な面を通して現われたその人の精神面」であるとしている。

② 「精神」の特質

身体, 心理を超えた人間の本質である「精神」は「精神性」, 「自由」, 「責任性」という3つの特質をもつとし

ている。

〈1〉「精神性」

人間と動物との区別がなされるのは精神の有無においてである。無意識には「衝動的」と「精神的」とがあるが, 「精神的無意識」は全ての意識の根源であり, 意識化された「精神性」の全ての源泉であるという。したがって, 精神性は精神的無意識から生成されるので, それ自体本質的に無意識的なものであるから客観化は不可能であり, 分析不可能である。あくまでも精神性それ自体は「精神自体の所産」によってしか認識できない。

〈2〉「自由性」

この「自由性」においても人間と動物の区別がなされ, 「自由性」は人間存在の特別の形態である。人間の意識の中で最も直接的な事実であり, Jaspersの「決断する動物」という言葉で示されるように自由意志による選択という場面で経験できるものである。人間のもつ「自由性」は, 「生来の本能的衝動」, 「遺伝的特質」, 「環境」の3つの対象において発揮されるという。

〈3〉「責任性」

人間の精神に自由性が存在するならば, それに必然的付随するものは「責任性」である。自己の「在り方」に「自由」があるなら, 自己の在り方を自己の自由意志をもって超越する「責任」が生じる。

ここでの「責任性」とは「使命性」とでも理解できるものであって, 自己の存在意義, 存在価値を実現化, 現実化, 具現化するという責任である。

この責任性は「良心」から由来するものであり, 良心はFreudの無意識的心理衝動であるリビドーから生成されるものではなく, 前述の精神的無意識から生成されるものである。

良心は「汝, 何々すべし」という形で直接的, 直感的, 絶対的に当人に体験されるものであり, 無意識的, かつ, 非合理的であり, 論理以前, すなわち, 合理的な反射反応の前のものであるという。しかし, この良心は, ある特定の個人の具体的な状況に適用される個人的な道徳法則ではない。あくまでも特定の時代, 特定の社会, 特定の人々に対してのみ価値を有するものではなく, 全人類に対して普遍的価値を有する道徳なのである。その根拠は神なのである。超自我の背後に存在する「神なる汝」, その「汝からの言葉」が「良心」なのである。

3.3 ログセラピーの背景としての「実存的自由」

Frankl^[1]によるログセラピーは彼の「実存的自由」についての思想より導出されたものであるが, 実存哲学の中での彼の実存的自由についての見解は, D.F.Twe-die^[10]によれば以下のようなものである。

① 実存哲学

「実存」という思想を今日の哲学に持ち込んだのは、Kierkegaard と Nietzsche であるが、Kierkegaard は最初の哲学者である。彼は19世紀初頭における人々の生きざまが偽善と墜落に満ちていることを批判し、人々が実存的に生きるべきことを主張したのである。彼の思想は、神学、哲学、心理学へ大なる影響を与え、20世紀において再評価されている。

その後、Bergson, Husserl, Scheler らによって実存についての思索がなされた。Bergson は生命の哲学の中で「生の飛躍」を主張し、人間、人間の存在意義についての哲学的次元での間に対して実存的考察を行なったのである。

1次大戦後は、Heidegger, Jaspers, Sartre らによって実存哲学が受継がれてきた。

② Frankl の「実存的自由」についての見解

Frankl の実存哲学と実存哲学の他の諸学派の人々との最も大きなちがいは、彼の「自由」についての考え、すなわち、「実存的自由」についての見解とそれに基づいての心理療法であるロゴセラピーを創設したことである。

〈1〉「実存的自由」

彼に云わせれば、「現代の実存哲学者達は、Kierkegaard の説く実存者の「自由」にのぼせあがり、人格の基礎である「自由」を全ての可能性に対する絶対的ともいえる選択性をもつと解釈している。」とのことである。「存在は本質に先行する。」と云っても所詮絶対的制約の下で極めて限られた「自由」であり、その自由の下で自己存在を自己決定できるという自由なのである。というのは、人類の生理・物理・身体的本質、そして、心理的本質は個々人が出生する以前に既に決定されており、さらに、人間個々人について云えば、彼の遺伝的本質は、彼の出生以前に既に彼の両親の存在において決定されているからである。この意味で、正に「父母未生以前の自己」存在なのである。したがって、人間の自由が全ての可能性が本人の自由意志による選択によって実現されるような自由であるはずがない。「念ず（欲す）れば、実現する」など正に妄想なのである。）

Frankl の「実存的自由」とは、決して「あるものからの自由 (freedom from)」ではなくて、「あるものための自由 (freedom for)」であり、「誰かの前での自由 (freedom before)」なのである。換言すれば、「人間の自由」とは、全能や勝手気ままの「自由」という意味ではなく、この点で他の殆んどの実存哲学、とくに仏実存学派の「自由」(“free for”の自由ではなくて、“free from”の自由)と Frankl の実存的自由とは異なるのである。Frankl の自由とは、人間存在が抱く諸々の欲求

の充足を阻害し、人間存在に苦痛や不快感を与える諸々の拘束や制約から解放されての自由という意味ではない。

〈2〉人間の「責任」

自由に必然的に付随するのは「責任」である。したがって、「実存的自由」に対しても当然いわば「実存的責任」とでも云うべき「責任」が付随する。それゆえ、実存的自由とは、云わば「責任への自由 (freedom to responsibility)」とでもよぶべきものである。

「責任」とは、Frankl によれば、人間個々人が彼の人生を通して、あるいは、投企して彼の「使命」である人間存在としての意義・価値を達成、実現するという「責任」である。この点において彼は Sartre の哲学を否定する。彼によれば、Sartre の哲学は、“freedom to”, “freedom for”を無視し、「人間とは?」, 「人間とはどうあるべきか?」に対して何等解答を与えていないとのことである。

4 心理療法としてのロゴセラピー

ロゴセラピーの概念について前述したが、ここでは、心理療法としてのロゴセラピーについて以下に概観する。

4.1 診断のための理論的基礎

Frankl^[1] は、診断のための理論的基礎として以下の事項について検討している。それらの事項について項目のみを列挙すると以下ようになる。

- ① 心理療法の条件としての精神障害の診断
- ② ロゴセラピーの診断
 - 〈1〉 病因の主因追求
 - 〈2〉 精神医学の訓練を受けた医師の領域としてのロゴセラピーの診断
- ③ 神経症の因による神経症の分類
身体因性、心因性、精神因性
- ④ 精神病理学の診断に心理テストを使用することに対する懐疑
- ⑤ 診断のための理論的次元
 - 〈1〉 病因的、あるいは、発生的次元
「身体因」, 「心因」の2つがある。
 - 〈2〉 現象学的、あるいは、徴候学的次元
「心理面」, 「身体面」の2つがある。

4.2 精神障害の型

前述の診断のための理論的次元を用いて4つの精神障害の型を導出し、Frankl^[1] は各型について考察しているが、それを概観すると以下ようになる。

① 精神病

病因的次元では「身体的」、徴候学的次元では「心理

面」であるのが「精神病」である。Frankl は、精神病の病因として「心理的」病因を認めない。

② 一般の疾患, いわゆる普通の病気

「身体的」, 「身体面」であるのがこれである。この型に「心身医学的疾患」, すなわち, 心理的な要因による身体的疾患を含めることを Frankl はある程度認めてはいるが, この場合, 心理要因はあくまでも主因ではないとしている。

③ 器官神経症

「心理的」, 「身体面」であるのがこれである。

④ 神経症

「心理的」, 「心理面」であるのがこれである。ロゴセラピーの治療対象となる「実存神経症」はこの型に含まれるので以下に神経症についての Frankl^[1] の見解を概観する。

4.3 神経症

① 神経症の定義について

馬場^[11]によれば現代の米の精神医学においては神経症についてははっきりした定義がないとのことである。米精神医学界作成の診断マニュアルの第3版(1980年)には“neuroses”, “neurotic”という術語は抹消されているという。また, 神経症という術語の使い方をめぐっては混乱がある。

② 神経症の特徴

神経症の特徴としては従来から以下のようなことが指摘されてきた。

〈1〉 心因性 (psychogenetic) であること。

精神疾患の因には内因, 外因, 心因の3種があるが, 神経症は心因 (心理的原因) によるものである。

〈2〉 機能的 (functional) な障害であること。

〈3〉 心身両面で障害が出現すること。

〈4〉 特有の性格特性が存在すること。

神経症が発症する場合, 発症に直接前駆するような心因 (「結実因子 (precipitating factor)」) に加えて, 神経症に罹りやすい準備性としての特有の性格特性が存在するとされてきた。その特有の性格特性とはいわゆる性格特性としての「神経質」であり, 他に「生来性の素質」が指摘されてきた。

そして, 「神経質」は, 出生以来の親子関係を中心とする家庭内の人間関係を通しての生活史の中で形成されると云われてきた。

③ Frankl の神経症についての見解

〈1〉 神経症の原因についての常識的見解の否定

従来からの「神経症」(Franklによれば「狭義」の神経症) についての Frankl^[1] の見解は以下のようなものである。神経症とは, 病因, 徴候共に心理的であり, ログセラ

ピーの主な治療対象である。

神経症の因の常識的見解はいわゆる「心理的圧力 (心理的外傷経験, 心的葛藤, コンプレックス)」であるが, この心理的圧力は神経症の誘発因になることはあるが, それ自体が病因となることはありえない。一般に病因と考えられているものは, 実際には単なる病状であり, 病因よりはむしろ徴候である場合が多い。例えば, 「心的葛藤」は, 「神経症」の原因というよりはむしろ神経症の1つの症状, 徴候そのものなのである。

〈2〉 神経症の原因としての「不安感」

Kierkegaard は, 不安は「自由のめまい」であり, 不安感が神経症の因となると云う。May は, 「不安」は「自己の存在価値の消失の脅威の急激なる生成の経験状態」であると云う。

Frankl^[1]によれば, 神経症 (的行動) の各種の反応型に共通して内在するのは「期待 (予期) 不安 (anticipatory anxiety)」であり, 「これ」が神経症の原因であるとしている。

〈3〉 神経症の型

神経症には以下の3つの型があるという。

(1) 不安神経症 (型反応)

「不安」になることに対する「不安」が原因である神経症である。不安の対象, 根拠がない場合に不安の根拠を探究し, 「恐怖症 (phobia)」になるという。

(2) 強迫神経症 (型反応)

強迫現象とは個人が制御不能ながゆえに個人が欲しないのに何等かの思考過程, 衝動, 行動が反復される現象である。自己の強迫現象に対する不安が原因である神経症である。

(3) 性的神経症 (型反応)

性的不能, 性的不感症に対する不安が原因である。

〈4〉 精神因性神経症

(1) 広義の神経症

これまで述べてきた神経症は, 従来から論議されてきたいわゆる「心因性」の反応性神経症である。普通一般に, 常識的には神経症と云えばこの種のものを指す。

しかし, Frankl^[1]は, 従来からのものを「狭義」の神経症として, 心理的原因 (心因) 以外に因がある神経症をも神経症のカテゴリーに入れて「広義」の神経症を考えているのである。そして, この広義の神経症の中に, 彼のロゴセラピーの「精神的」原因による「神経症」, すなわち, 「精神因性神経症」がある。

Frankl^[1]は, 広義の神経症として「偽神経症」と「精神因性神経症」を指摘している。

(2) 偽神経症 (pseudo-neurosis)

「機能的疾患」ともよばれているが, 「身体因性」で「心理症状」を示す神経症である。理論的には「精神病」

となるが、精神病の徴候を示さないので神経症とされている。

(3) 精神因性神経症

強制収容所という人間存在にとって正に極限状況で生命を全うした Frankl^[2] の体験によって彼が創唱したのがこの「精神因性神経症」である。従来の神経症とは別種のものであることは前述した。しかし、現代という時代を考えると、「時代の病い」として同定できる神経症なのである。いわば、「生きがい神経症」とよべる神経症である。

Frankl によれば、「実存的欲求不満」（「生きがい」欲求不満）から生じる人生の「空虚さ」と人生の目的の無さである「実存的空虚」（「生きがい」欠乏の空しさ）が因となって生成される神経症とのことである。「実存的欲求不満」は、高度産業化社会という現代社会の特質を考えると、ここから生起する「人間疎外」がその根本的・根原的原因と考えられるので、この「不満」は人間存在として当然、必然であるから、「病的」とは云えないとのことである。「病的」との判断は病理主義の誤りであるという。

心因性神経症が、「衝動間葛藤」、「心的構造間葛藤」に由来するのに対して、精神因性神経症は「価値間葛藤」、「価値的欲求不満」に由来するのである。すなわち、「人間にとって最も重要な価値である自己の人生の究極の目的・意義・意味（生きがい）」に関する欲求不満から生ずる神経症である。

「精神それ自体の病気が「精神病」であるならば、「精神（「心理」ではない）」から生じる病気が「精神因性神経症」なのである。そして、この精神因性神経症の最適の治療法として創設されたのがロゴセラピーなのである。

4.4 心理療法としてのロゴセラピー

Frankl^[1] のロゴセラピーは以下のようなものである。

① 治療の位置づけ

〈1〉 ロゴセラピーの人間観

全体的人間観に立脚し、「実存的自由」を備えた存在として人間を捉えている。治療技術そのものはあまり強調しない。

〈2〉 技芸（art）としての「心理療法」

治療者には、心理療法実施者としての訓練が要求される。

〈3〉 心理療法の過程

人間同士の親密さの関係から科学的な冷い客観性による関係にまでまたがる。

〈4〉 治療者の自己評価

治療者自身は、自己の動機と人格構造とを把握してお

くことを要求される。

〈5〉 実存的な関係

治療者と患者との間には実存的な関係が要求される。

② 治療の原則

〈1〉 人間の「精神性」を治療対象とするものである。患者の「精神」の抵抗力を増強せしめることによって、彼の「精神性」による自己超越を支援する。

〈2〉 指示的療法である。

精神分析による心理療法では、患者は「いいたくないことを話させられる」のに対して、ロゴセラピーによる精神療法では、患者は「聞きたくないことを聞かされる」のである。

〈3〉 治療対象は神経症である。

〈4〉 短期間の治療である。

〈5〉 5つの原則

(1) カタルシス（洗滌）効果をもつこと。

(2) 身体面の精密検査を実施すること。

(3) (2)の結果についての説明では医学用語の乱用は避けること。

(4) (2)の結果についての適切な説明は必要である。

(5) (4)の適切な説明の仕方について考慮すること。

③ 神経症に対する「非特殊療法」としてのロゴセラピー

〈1〉 「心因性神経症」に対する治療法としてのロゴセラピー

心因性神経症に対して Frankl は前述のようにその心因としての心理的圧力をそれが誘発因になりうることは認めているが、それ自体が病因になることはありえないとしている。とすれば、心因性神経症といえどもその病因は精神性ということになる。この意味では精神因性神経症に対するロゴセラピーが狭義の神経症に対する療法になりうると思われる。

Frankl^[1] は、ロゴセラピーはいわゆる神経症に対しては、患者の徴候自体、徴候を誘発した過去の心的外傷に注目するのではなく、徴候に対する患者自身の態度に注目するとしている。そして、前述のように Frankl は神経症最大因は「期待不安」であり、期待不安による機能破壊・障害としての徴候・症状であるという。したがって、この期待不安を除去する方法が神経症の治療法となる。ここで Frankl は以下の2つの治療法を創出している。

〈2〉 「期待不安」除去の2つの治療法

(1) 逆説的志向法

この方法は、いわば「不安」を「皮肉」へ転換するという方法である。自己の欠点を「見据える」ことを志向することによって自己の欠点の出現する期待不安から解放されるという方法である。

ロゴセラピーの人間学的原理から直接生成されるのがこの方法である。すなわち、人間に備わった「心理精神的拮抗作用」、「精神の反撥力」を通して心理身体的な平面を超越して存在しようとする人間の能力に基づく方法である。したがって、本当の意味で「精神の療法」である。

この能力に基づいて自己の不安を客観し、そして、その不安に打ちひしがれることなく不安に拮抗・反撥して「不安」を「皮肉」ることによって不安から解放されるという方法である。前述の心理精神的拮抗作用、精神の反撥力から生ずるのは「ユーモア(humour)」の能力・感覚である。「ユーモア」とは自己の「不安・欠点」を「笑う」ことができる能力・感覚のことであるから、この方法はユーモア療法とも云える。この能力・感覚によって人間は自己を超越するわけであるから、ユーモアの能力・感覚は人間独自の実存的能力と云えるのである。

(2) 反省除去法

「反省中和法」というべき方法である。機能障害を伴った神経症的反応に付随している強迫的な自己観察による極度な反省に対しての患者の注意を彼自身から彼の仕事や彼のパートナーに移すことによって「中和」、「除去」しようとする方法である。

前述の「逆説的志向」方法が「徴候を皮肉る」という方法ならば、この「反省除去」方法は「徴候を無視する」という方法である。

④ 精神因性神経症の「特殊療法」としてのロゴセラピー

実存的欲求不満による実存的空虚から神経症的徴候、すなわち、精神因性神経症が生ずるという Frankl の理論からは、実存的欲求不満の解消が治療の根本となる。

人間個々人は、彼の人生の目的・意義・意味を達成することによって自己を超越し生の充実を実感する。人生の目的・意義・意味の達成が阻害されるとき実存的欲求不満に陥るということから、根本的・根源的治療方法は患者の「価値観」の世界の拡大である。この価値の世界の拡大に対して支援を行うのがロゴセラピーである。

5 PIL と自己実現論との関係

これまでのことから Frankl^[1] の PIL 概念についての理論は「生きがい」理論であることが分かる。また、分析心理学を創設した Jung^[11] の「自己実現」理論も「生きがい」についての理論と云える(塹江^[12])。なぜならば、彼の理論による限り、人間個々人にとって「自己実現」が「生きがい」欲求を充足させようとする対象、すなわち、「生きがい」の対象となり、自己実現達成(への過程)が「生きがい」(感・意識)の獲得になるからである。

とすれば、PIL 理論と Jung の自己実現論との関係を以下のように考えることができる。

PIL 理論においては、「価値」の達成が「生きがい」(欲求の充足)である。そして、価値の1つとして「創造価値」が指摘されている。Jung の自己実現は「創造価値」を有する。なぜならば、自己実現による「個性的な「生」の具現化は、人間の「生き方(生き様)」についての1つのモデルを「創造」することになるからである。

したがって、Jung の「自己実現理論」は、PIL 理論を補足し、それを深化、拡大させた関係として捉えることができる。

6 PIL と「生きがい」との関係

「生きがい」という言葉は、日本語にしかないという(神谷^[13]、見田^[14])。とすれば、前に PIL が「生きがい」と同義であると述べたが、正確には、PIL は日本語で言えば「生きがい」という言葉(概念)に相当する言葉(概念)であると言うべきであろう。あるいは、PIL は、「欧米的」生きがいであると云うべきであろう。

「生きがい」という言葉が日本語にしかないとすれば、「生きがい」と PIL との相異が存在するはずである。この相異を著者は以下のように考える。

PIL 理論においては、前述のように「神」に根拠づけられた(基盤を置く)「良心」から生まれる「責任・使命」である「価値実現」が「生きがい」(欲求の充足)(ということは「生きがい」感・意識の獲得)であった。つまり、「生きがい」は「神」によって付与されるものであり、換言すれば、「生きがい」調達の源泉は「神」であった。

欧米社会、欧米文化、ということは、欧米人の精神構造(心)の根底、根源に存在するのは「神」(キリスト教)である。欧米人においては、人間個々人の存在そのものが神によって根拠づけられ(許され)ている。したがって、人間個々人の生が価値を有するか、生きるに値するか、つまり、「生きがい」があるかを決定するのも当然神なのである。

これに対して、日本の社会、日本人の心には、神、宗教が不在である。(見田^[14]、宮家^[15])。したがって、「生きがい」調達の源泉を「神」に求めることはできない。日本人にとって「生きがい」調達の源泉は「人間関係」なのである。

このことは、日本人の「罪悪感」の在り方(源泉)と日本人の自己存在の基盤の2つのことを考察することによって論証できる。

① 欧米人の「罪悪感」の源泉が「神」であるのに対

して、日本人の場合は、「それ」が「人間関係」である(土居^[6])。したがって、欧米人にとっての「神」は、日本人にとっての「人間関係」であると云える。

② 自己存在そのものの根拠(基盤)が欧米人においては「神」であるのに対して、日本人の場合は「それ」が「人間関係」であると云える。

このことは以下の2つのことによって論証できる。

〈1〉 「人間関係」と「関係人間」

日本人の「人間関係」は、欧米人の「それ」と異なると云わば「関係人間」とでもよぶべきものである(木村^[7])。つまり、「個」の存在に先行して「関係」が存在する。したがって、「個」(の在り方(究極的には「生き方」に及ぶ)は、「関係」の在り方によって規制、決定されるのである。換言すれば、「個」の存在の根拠(基盤)が「関係」にあるのである。

〈2〉 「対神恐怖症」と「対人恐怖症」

欧米人の云わば「対神恐怖症」とでもよぶべきものの存在に対して、日本人の場合は「対人恐怖症」が存在すること(岸田^[8])。

以上のことから、「生きがい」の源泉が欧米人の場合は「神」であるのに対して、日本人の場合はそれが「人間関係」であると云える。この相異を表現したものがPILと「生きがい」という言葉なのである。

7 結論

以上のことから「PIL」という概念(言葉)について以下のことを結論できる。

- ① 「PIL」という概念(言葉)は、日本語の「生きがい」という概念(言葉)に相当し、云わば、「欧米的「生きがい」」とできる。
- ② Jungの「自己実現」という概念(言葉)は、「生きがい」欲求充足の手段、換言すれば、「生きがい」の対象に関する概念である。PIL理論における「生きがい」対象としての「価値実現」での「価値」の1つの形式に関わる概念(言葉)である。
- ③ 「PIL」と「生きがい」との相異は、「PIL」が「神」に根拠づけられる(「神」から付与される)のに対して、「生きがい」においては、「神」が「人間関係」に置換されることである。

参考文献

[1] Frankl, V.E.: "Psychotherapy and Existential-

- ism", Washington Square Press (1947)
- [2] Frankl, V.E.: "Ein Psycholog Erlebt Das Konzentrationslager", Wien: Jugend und Volk (1947)
- [3] Crumbaugh, J.C. and Maholick, L.T.: "An Experimental Study in Existentialism: The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis", J. Clinical Psychol., pp.200-207, Vol.20, No.2, (1964)
- [4] Crumbaugh, J.C.: "Cross-Validation of Purpose in Life Test based on Frankl's Concepts", J. Individual Psychol., pp.74-81, Vol.24, (1968)
- [5] Crumbaugh, J.C., Raphael, S.M., and Sharader, R.R.: "Frankl's Will to Meaning in A Religious Order", J. Clinical Psychol., pp.206-207, Vol.26, (1970)
- [6] Crumbaugh, J.C.: "Frankl's Logotherapy: A New Orientation in Counseling", J. Religion and Health, pp.377-386, Vol.10, (1971)
- [7] Crumbaugh, J.C.: "Aging and Adjustment: The Applicability of Logotherapy and the Purpose-in-Life Test", The Gerontologist, pp.418-420, Vol.12, No.4, (1972)
- [8] Crumbaugh, J.C.: "The Seeking of Noetic Goals Test (SONG): A Complementary Scale To The Purpose In Life Test (PIL)", J. Clinical Psychol., pp.900-907, Vol.33, No.3, (1977)
- [9] Crumbaugh, J.C. and Henrion, R.: "The PIL Test: Administration, Interpretation, Uses Theory and Critique", International Forum for Logotherapy, pp.76-88, Vol.11, No.1, (1988)
- [10] Tweedie, D.F.: "Logotherapy and The Christian Faith", Baker Book House (1961)
- [11] 河合隼雄: 「ユング心理学入門」, 培風館 (1967)
- [12] 塹江清志: 「現代日本人の生きがい」, 酒井書店 (1981)
- [13] 神谷美恵子: 「生きがいについて」, みすず書房 (1980)
- [14] 見田宗介: 「現代の生きがい」, 日本経済新聞社 (1970)
- [15] 宮家 準: 「日本宗教の構造」, 慶応通信 (1974)
- [16] 土居健郎: 「甘えの構造」, 弘文堂 (1971)
- [17] 木村 敏: 「人と人との間」, 弘文堂 (1972)
- [18] 岸田 秀: 「幻想の未来」, 河出書房新社 (1994)